

六 廿 化



4

俳句雑誌りっか

2013 (平成25年)

cover design Yuna Mizumo

山田六甲

東風吹くや城の姿はなけれども
遠く見ゆ羽を繕ふ春の鴨
龍の玉指輪に欲しとつぶやきぬ
中空の城跡にきて朧かな
山城へ胸突八丁春寒し
んとある山の雪解の始まりぬ
薄氷の但馬の池を眼下にす
目の中に入りて甘かり春の風
菜の花を手に城山を下りけり
頑固なる急峻の城落椿

寒さうに広がりゆける芝火かな
如月の風や但馬の国を誉め
橋渡る人を眼下に黄砂降る
縦横に田を耕してありにけり
めまいかな眼下の梅の眩さに
マチユピチュのここに跡あり冴返る
春光の膜の中なる城址かな
耕せる音城山に上り来る
夜の畦走ることしか火は知らず
天に座す思ひの城や草萌る

梅映る水の中にも風吹いて
ゴム鞠のやうに春風吹いて来し
櫛によきはなびらもたぬ柘植の花
電線に一番乗りのつばめかな
花つけて枳殻は人拒ぬに
真下から梯子伸びをり春の天
石組みし人を偲べば春いまだ
日輪へ耕せる顔進みゆく
小さき手に引かれて登る梅の坂
早蕨に足許危くしてをりぬ

いく瀬にも砥がれて来たる雪解水
鉄壁の城にはあらず草萌て
凍解の湯気湧きゐたる城下かな
るりはこべ下城の指に触れにけり
干満の春の雲にもありにけり
幾筋も雪解の走りゐる山河

亀田克憲君と（佐用桜山・旧宮本村）

残雪を故郷の如く指さしぬ
温かや多羅葉の木の天を突き

蜂蜜の凝固はじまる寒の入り

佐津のぼる

はちみつのごようこはじまるかんのいり さつのぼる

初日あげからんとしたる沖のこる

元朝や神在す嶺雲脱がず

山なみのうしろにも山初霞

節分会だぶつく鬼の衣裳かな

実にあっさりとした寒の入りをとらえている。肌で感じ取っているのだ。「蜂蜜が固まりだしたなあ」と食卓の話題に上ったのだろう。上ったと大袈裟なことではなく、何となく口をついて出たのかも知れない。生活の一齣をさらりと詠んだ。冬の初め、固まるかみえて固まらなかつた蜂蜜が寒極まってついに固まりはじめた。いかにも寒の入りらしい物のとらえ方を物で示している。のぼる作品が徐々に変わってきて本領を発揮しだしたと不二男がぼろっと言った。その通り。選者も同感。「解ると言うことは変わるからだ」。

初明り水平線の近づき来

笹村 政子

初明り水平線の近づき来

去年今年煮豆の泡をすくひをり

冬晴や空からの餌箱風に鳴き

泣くまじく風花の空仰ぎをり

はつあかりすいへいせんのちかづきく さとむらまよこ

優れた主観写生。初明かりとは元日の明け方東の空にさしてくる曙。水平線が明るくなつて、一瞬黄金の線が引かれたように眩しくなつた。水平線から手前の海が暗く消えたようので、その分、沖が近づいてきたように感じた。俳句が向こうからやってきたのだ。俳句は感動や情景を多くの言葉で費やせないから近づいてきた感触だけに焦点を絞っている。いい作品は言葉だけでなく感動も読者の脳裏に焼き付く。初明かりの沖を見る度にこの句が口をついて出るだろう。ご主人の希望もあつて海の見える家に移つたおかげか。

雪 卿 集

冬の雨

梶浦玲良子

茶の花の影がくすぐる母の畑
寒柝の通り過ぎたる電子辞書
残されし水車と火の見冬の雨
屋根を日の低く走れる凍大根
元日も常のいちにちもう居ない

時 雨

志方章子

時雨るるや土の乾きに足らざるも
髪切つて襟足寒く帰り来し
古日記読むやあの日にたち返り
冬ぬくし襟元すこし緩めけり
千両の映えし一壺となりけり

せつ じゆ しゆう
雪 樹 集

枯 野

藤生不二男

寒鴉鳴くや一日のあてのなし
争うてともに発ちけり寒鴉
寒菊の日に抗うて咲きにけり
疾走の鼯隠れし冬菜畑
返したる塊くづの光れる荒起し

冬かもめ

溝 渕 弘 志

わけありて一人呑む酒外は雪
冬かもめ波の白さに消えにけり
白息の交りにけり朝の駅
柚子香る湯上り妻のすれ違ひ
目で笑ひつつ襟卷の挨拶す

蛭雪譚 六甲



二十五年三月号選後に

子の頬を染めてをりたる初日の出

永田万年青

今年初めての太陽、初日を家族で待っている、待望の初日が上ってきた。主人公は太陽より子ども顔の方が気になっている。子どもが喜んでくればこそ喜びの限り。初日を待つのは今まで何十年としてきたけれど子どもの頬を日の光りが染めてくると、もう初日より子ども顔の方がありがたく神々しい。「どう？綺麗やろ」と思いつきり同意を促すのである。どきどきしながら子の返事を待っている。そういうのを親ばか孫ばかというが、心の弾みが良く理解できる。

歓声の一つになりぬ初日の出

初日を待っている光景は前句と同じ。身内ばかりでなく、様々な人々が元日のご来光を待っていた。それまででんぱらぱらにお喋りしていたが穂出とともに一斉に歓声を上げ、声が揃った。誰彼となくおめでとを言い合う。あとは下山途中、初日の見事な様子を語り合って、初詣へ向かったり自宅へ帰って行くのである。

六花集

雪時雨駆け込み宿の軒浅く
戸袋に風音棲ませ冬ごもる
寄り添うて今を大事に蜜柑むく
なるやうにしかならずして寒に入る
二人乗り自転車駆けて日脚伸びる

平居 滯子

極月の時の止りし時計四つ
工場のそののこぎり屋根に冬の月
かりそめの宿と思へど注連飾る
によりよるに宿と三本線の年賀状
七草に足らざる粥をもて余す

小寺 ふく子

良し悪しきくまなく照らす寒の月
風もなく山茶花日和きのう今日
裸木の孤独にたへて空仰ぐ
冬ざる護岸工事のダンパーク
をちこちで餅焼くかげや大どんど